

フランス語における半過去の *si* 節の用法

曾 我 祐 典

0. はじめに

フランス語では、事態 *P* と事態 *Q* が「*P* がある状況には *Q* がある、*P* がある状況なら *Q* がある」といった観念的（論理的）関係にあることをしばしば〈*si P, Q*〉の構文で表す⁽¹⁾。次の (01) や (02), (03) はその発話例である⁽²⁾。

(01) *Si elle travaillait* autant, c'était pour ses parents.

(02) *Si elle était* ma fille, je ne la laisserais pas agir comme ça.

(03) *Si Sophie le quittait*, André aurait du chagrin.

(G.-J. Barcelo et al., 2006, 71)

発話者は、(01) では過去の現実の状況を半過去の〈*si P*〉によって表し (*si* の現実用法⁽³⁾)、その状況において存在していた事態 *Q* を半過去を用いて表している。(02), (03) では現在または未来の想像上の状況を半過去の〈*si P*〉によって設定し (*si* の仮定用法)、その状況において存在することになると推測される事態を過去未来形の *Q* で表している。

(02), (03) のような仮定用法の *si* 節における半過去使用については Bres (2005) が紹介するような諸説があるが、必ずしも説得力が十分だとは言えない。本稿では、対話場面における聞き手の受け取りかたを重視する立場から、半過去の特性と〈*si P, Q*〉構文のはたらきを踏まえて、現在または未来の想像上の状況を半過去の *si* 節によって設定するしくみを明らかにすることをめざす。

以下では、まず半過去の特性を示し (1), 現実用法の場合の〈*si P, Q*〉構

文のはたらき (2)、仮定用法の場合の si 節における半過去使用 (3) の順に論じる。

1. 半過去の特性

現在または未来の想像上の状況を設定する際に〈si P〉の P を半過去で表すのは、それに適した特性を半過去がそなえているからである。ここでは、半過去の特性がどのようなものであるかを、「以前スペース」の事態を表すという半過去の基本的なはたらきを踏まえて確認しておこう。

1. 1. 基準スペースから想起する以前スペース

発話者には、普通、「いま」を中心とする時間的広がりである「現在スペース」にいるという意識がある。発話者が現在スペースととらえる時間的広がり幅は、一瞬からほぼ永遠までさまざまである。発話者は、現在スペースにおいて生起・持続に立ち会っている事態をはじめとするさまざまな事態を表すときに、現在形（行為が完了段階であれば複合過去）を用いる。また、現在スペースから過去方向を振り返って記憶の中から「こういう出来事があった」と取り出す事態を表すときに、複合過去を用いる。さらに、現在スペースから未来方向を展望して思い描く事態を表すときに、未来形（行為が完了段階であれば前未来）を用いる。

発話者は、現在スペースにいるという意識を保ったまま、現在スペースを基準としてそれ以前のなんらかの時間的広がりである「以前スペース」を想起して一時的にそこにいるような気持ちになることがある。現在スペースから見た以前スペースを以下では「過去スペース」と呼ぶことにしよう。以前スペースには、過去スペースを基準スペースとして想起する「過去スペースから見た以前スペース」もあれば、未来のある時を基準スペースとして想起する「未来時から見た以前スペース」もある。図 1 に示すように、どの以前スペースも基準スペースとは断絶していて、基準スペースから多かれ少なかれ時間的に隔たっ

ている。

/////////
基準スペース

/////////
以前スペース

図 1

ある以前スペースに一時的に移っているような気持ちになっている発話者は、そこにおいて立ち会っているととらえる事態をはじめとするさまざまな事態をフランス語で表すときに半過去（行為が完了段階であれば大過去）を用いる⁽⁴⁾。

(04) – (06) の斜字体の半過去は、それぞれ過去スペース、過去スペースから見た以前スペース、未来時から見た以前スペースの事態を表している。

(04) A cette époque-là elle *habitait* chez ses parents.

(05) Il *dégageait* une autorité qui m'impressionnait tant elle *tranchait* avec ce qu'il *était* quelques minutes auparavant.

(A. Wiazemsky, 2012, *Une année studieuse*, 49)

(06) La semaine prochaine elle nous dira comment *c'était*.

(04) の *elle habitait chez ses parents* という事態は、A cette époque-là で想起される過去スペース（現在スペースから見た以前スペース）の事態である。(05) の *il (= J.-L. Godard) était* という事態は、*elle (= cette autorité) tranchait* があった過去スペースから見た以前スペースの事態である。(06) の *comment c'était* という事態は、*elle nous dira* という事態が生起するであろう未来時から見た以前スペースの事態である。

ここで、半過去の特性を次のようにまとめておこう。

(07) 半過去を用いるのは、以前スペースを想起し、そこにおいて生起・持続する事態を表すときである。半過去の発話は事態を表すとともに、その事態が生起・持続する以前スペースを喚起する。

発話者は、ある以前スペースに仮に移っているような気持ちになっているとき

に、さらに過去方向を振り返って記憶の中から「こういう出来事があった」と取り出すことがある。そのような「以前スペースから見た過去の出来事」は、大過去で表す。また、ある以前スペースから未来方向を展望して思い描く事態を表すときに、過去未来形（行為が完了段階であれば過去前未来）を用いる。

本稿で扱うのは現在スペースが基準スペースの場合だけなので、以下では以前スペースのうちで過去スペースだけを論じることになる。

1. 2. 過去スペース

上の 1. 1. で、発話者は現在スペースにいるという意識を保ったまま過去スペースを想起して一時的にそこにいるような気持ちになることがあると述べた。過去スペースの想起は、現在スペースとの対照によることもあれば、談話に出てきたなんらかの過去の要素によることもある。

1. 2. 1. 現在スペースとの対照により想起する過去スペース

現在スペースとの対照によって想起する過去スペースは、現在スペースとは断絶した広がりであり、その時間幅は表そうとする事態に応じてさまざまである。発話例としては次のようなものを示すことができる。

(08) *Qu'est-ce que tu fous là ? — Je te cherchais.*

(D. de Vigan, 2007, *No et moi*, Poche, 92)

(09) *Ah, j'oubliais. J'ai un cadeau pour ton fils.*

(08) では、相手が目の前にいる現在スペースとの対照によってある過去スペース（相手が不在であった時間的に近い過去スペース）を想起し、そこにあった事態〈*je-te-chercher*〉を半過去で表している。(09) では渡すべき贈り物があることを意識している現在スペースとの対照によってある過去スペース（そのことを忘れかけていた時間的に近い過去スペース）を想起し、そこで生起しつつあった事態〈*je-oublier*〉を半過去で表している。

いわゆる「語調緩和の半過去」も、現在スペースとの対照によって過去スペースを想起する場合に含めることができる。これについては、本稿では論じな

い(5)。

1. 2. 2. 過去の要素を契機として想起する過去スペース

発話者と聞き手は、談話に出てきたなんらかの過去の要素をきっかけとして過去スペースを想起することもある。過去の要素には、出来事 (*J'ai lu ce roman.*) や人・事物 (*sa grand-mère, mon école maternelle*) などがある。また、時間的狀況 (*le mois dernier, quand je l'ai rencontrée*) もある。このような要素をきっかけとして想起する過去スペースは、出来事・人・事物・時間的狀況などの時点・時期に対応する「そのとき、その時期、そのころ」といった時間的広がりである。過去スペースは、発話者が言及しようとしている事態が生起・持続する枠組であり、その時間幅は一瞬からほぼ永遠までさまざまである。

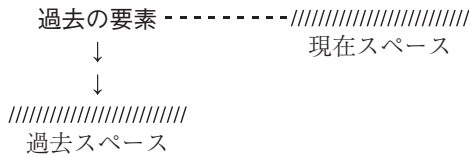


図 2

談話に出てきた要素をきっかけとして過去スペースを想起する場合の半過去の発話例としては、(10)－(13) のようなものがよく見られる。下線部が過去の要素である。

(10) Elle a voulu s'arrêter, mais elle *roulait* trop vite.

(11) Galilée a soutenu que la Terre *tournait* autour du Soleil.

(12) Delphine : Mais je veux dire, vous restez à Paris, vous ne partez jamais ?

Grand-père : Jamais, jamais ! Avant, je *partais* deux mois, je *partais* dans le Jura. (E. Rohmer, 1986, *Le rayon vert*)

きっかけとなる過去の要素は、(10) では過去の出来事 (彼女が停車しようとした)、(11) では歴史上の人物 (ガリレオ)、(12) では時間的狀況 (以前)

である。半過去で表すのは、(10)、(11) では持続中と見なすことができる事態であり、(12) では繰り返し生起するタイプの事態であると言える。

また、(13) のような発話例が見られることもある。

(13) J'ai vu Léa et son ami. Ils rentraient de vacances.

発話者は、記憶の中からある出来事を取り出して、それを複合過去の発話 **J'ai vu ...** で表している。そして、その出来事（過去の要素）をきっかけとしてある過去スペースを想起し、その過去スペースの事態〈**ils-rentrent-de vacances**〉を半過去で表している。この「彼らが休暇から戻ってくる」という事態は、「私がレアとレアの彼氏に会った」という出来事に先行し、出来事のありように深くかかわっている。

このように過去スペースの事態は多様であり、多くの発話例の観察から、半過去は完了アスペクトを除くさまざまなアスペクトについて用いる時制であることが分かる。

1. 3. 過去スペースの事態を表す半過去の特性

ここで、これまで見てきたことを踏まえて、本稿で論じる〈**si P**〉の用法にかかわる半過去の特性を次のようにまとめておこう。

(14) 半過去を用いるのは、過去スペースを想起し、そこにおいて生起・持続する事態を表すときである。半過去の発話は事態を表すとともに、その事態が生起・持続する過去スペースを喚起する。

発話者が事態 **P** を半過去で表すためには、**P** が存在する場面・枠組となる過去スペースをあらかじめ想起していることが前提となる。一方、半過去の発話を耳にした聞き手は、事態の内容をとらえるだけでなく、その事態が存在する過去スペースを想起することになる。下の 3. 2. と 3. 3. で見るように、このことが想像上の状況を〈**si P**〉によって設定する際の半過去使用に深くかかわっている。

2. 現実用法の場合の 〈*si P, Q*〉 構文のはたらき

ここでは、現実用法の発話例の分析を通して 〈*si P, Q*〉 構文のはたらきを明らかにしていこう。

2. 1. 〈*si P*〉 によって設定する現実の状況

まず、*P* が現在スペースの事態である発話例をいくつか見ておこう。

(15) *Si elle revient te voir comme ça, c'est qu'elle est vraiment amoureuse de toi.*

(16) *Si mon travail est ennuyeux, il est facile et je suis bien payé.*

(15) の発話者は、「彼女がこのようにあなたに会いに来る」という現実の特異な事態 *P* を問題にして、「彼女があなたに本当に恋している」という *Q* によって事情説明をしている。(16) の発話者は、「仕事が退屈である」という現実の困った事態 *P* を問題にして、それとは逆方向の「それは簡単で給料が良い」という *Q* によって埋め合わせをしている。

このように発話者が現実の状況を設定する場合の *P* について、林 (2001, 18) は「真実性が共話者に知られていることが前提となっている」と述べている。他にも「真 *vérité*」や「事実 *fait, factuel*」ということばを用いて記述する文献は少なくない。しかし、それらの語句は、(17), (18) のような未来の事態 *P* を話題にする発話には適合しないだろう。

(17) A: *Elle ne dépassera pas son maître.*

B: *Si elle ne dépassera pas son maître, c'est qu'on ne dépasse pas la perfection.*

(18) A: *Il viendra ?*

B: *Oui. Mais s'il viendra, ce n'est pas pour la raison que tu crois.*

(17) の「彼女が師を追い抜かない」という否定を含む *P* も、(18) の「彼が来る」という特異な *P* も、未来において生起する見通しの事態である。本稿

では、その点を考慮して「現実」ということばを用いておく。

2. 2. 〈*si* P, Q〉構文のはたらき

(15)–(18) のような発話例からも分かることだが、現実用法の場合の *P* は聞き手も知っていると思わせる事態で、発話者が取り上げるのはなんらかの問題をはらむ事態としてである。発話者はなんらかの問題をはらむ *P* のある状況を〈*si* *P*〉で設定し、その状況に *Q* があることを言い添えることによって問題に決着をつけようとすると言える⁽⁶⁾。〈*si* *P*, *Q*〉構文のはたらきは、次のように示すことができるだろう。

(19) 〈*si* *P*, *Q*〉構文は、「*P* がある状況には *Q* があって安定する」ということを表す。

これは、*P* が過去スペースの事態である場合についてもあてはまる。そのことを (01) や (20)–(22) に即して確認しよう。発話者は、*P* がある状況を、過去スペースにおいて現実にあった状況として半過去の〈*si* *P*〉によって設定する。

(01) Si elle *travaillait* autant, c'était pour ses parents.

(20) S'il *mentait* tout le temps, personne n'était dupe.

(21) Si je *savais* qui il était, je n'avais vu aucun de ses films.

(A. Wiazemsky, 2012, *Une année studieuse*, 12)

(22) Si tout le monde *connaissait* Nathalie dans la société, personne ne savait vraiment qui était Markus.

(D. Fœnkinos, 2009, *La délicatesse*, Folio, 156)

(01) では、「彼女がそんなにも勉強していた」という過去スペースの不審に感じられるおそれのある事態を問題にして、「両親のためだった」という *Q* で事情説明をすることによって不審の念を払拭しようとしている。(20) では、「彼はしょっちゅう嘘をついていた」という *P* は困った事態だが、それと逆方向の「だれも騙されていなかった」という *Q* によって形勢の立て直しをはかっている。この (20) と同様に、(21), (22) でも特異なこととして *P* を

問題にし、*P* に対抗する事態である *Q* によって均衡を回復しようとしている。どの発話例にも「たしかに *P* はあるが、他方で *Q* がある」という論理構造があり、*P* と *Q* のあいだには「なんらかの意味で *P* は問題をはらんでいるが、*P* のある状況には *Q* があるために物事のバランスが取れて安定状態が得られている」という関係が認められる。

2. 1. で見たように、林 (2001) は *P* が聞き手も知っている事態であると考えている。たしかに発話例の多くについてはそのとおりだが、(21), (22) のような場合は聞き手 (読み手) があらかじめ知っている事態であると断定することはできない。「発話者は、聞き手が知っている事態であるという姿勢で *P* を話題にする」というのがより事実に近いだろう。

3. 想像上の状況を設定する 〈*si P*〉

こんどは、仮定用法の場合、すなわち発話者が想像上の状況を設定する場合である。想像上の状況は、成立する蓋然性が高いものと高くないものに区別できる。ここでは、現在スペースまたは未来において成立する蓋然性が高くない状況を半過去の 〈*si P*〉を用いて設定するしぐみを、対話場面における聞き手の受け取りかたを重視する立場から明らかにしていこう。

3. 1. 現在スペースまたは未来の蓋然性が高くない状況

成立する蓋然性が高くない状況には、蓋然性が低い状況 (現実味のうすい状況) と蓋然性がまったく無い状況 (現実に反する状況) がある。

3. 1. 1. 現在スペースの状況

まず、現在スペースについて状況を設定する場合である。現実に反する状況を設定する発話例としてよく見られるのは (02) や (23) – (25) のようなものである。

(02) *Si elle était ma fille, je ne la laisserais pas agir comme ça.*

- (23) S'ils le *savaient*, ils se tiendraient sur leurs gardes, c'est ce qui n'arrive pas. (F. Truffaut, 1980, *Le dernier métro*)
- (24) Si ça ne *tenait* qu'à lui, il retournerait immédiatement commander une bière. (P. Lapeyre, 2010, *La vie est brève*, P.O.L., 15)
- (25) Si elle *parlait* un peu le dialecte sicilien, ils la comprendraient mieux.

これらの発話例の場合、発話者は現在スペースにおいて現実には成立していない状況を半過去の〈*si P*〉によって設定している。

よりまれなことであるが、発話者は次のように現在スペースの現実味のうすい状況を設定することもある。

- (26) Si vous *aviez* un tournevis, je vous réparerais ça facilement.
- (27) Si le nouveau chef *lisait* le français, ça faciliterait bien notre travail.
- (28) La tante Julie nous rend visite de temps en temps. Si elle *pouvait* venir plus souvent, mes grands-parents seraient très contents.

(26) の発話者は街なかで眼鏡フレームのねじが緩んだ相手がドライバーを身につけていることはないだろうと考えながら、(27) の発話者は新任の上司にフランス語読解力があることを疑わしく思いつつ、(28) の発話はジュリー叔母さんがもっと家に来ることは無理だろうと思いながら、蓋然性の低い状況を半過去の〈*si P*〉によって設定している。

3. 1. 2. 未来の状況

未来について状況を設定する場合であるが、しばしば発話者は現実味のうすい状況を設定する。発話例としては、(03) や (29) – (31) のようなものを挙げるができる。

- (03) Si Sophie le *quittait*, André aurait du chagrin. (G.-J. Barcelo et al., 2006, 71)
- (29) Effectivement, si je te *présentais* à eux, ils penseraient que je veux

t'épouser. (E. Rohmer, 1992, *Conte d'hiver*)

(30) Si elle se *faisait* prendre, ce serait terrible pour toute la communauté chinoise ... (G. de Villiers, 1989, *Arnaque à Brunei*, 175)

(31) Ce serait si beau si on *pouvait* partir ensemble.

(E. Rohmer, 1992, *Conte d'hiver*)

これらの発話例の場合、発話者は未来において成立する蓋然性の低い状況を半過去の〈*si P*〉によって設定している。

よりまれなことであるが、発話者は次のように未来の現実に反する状況を設定することもある。

(32) Demain c'est vendredi. Si *c'était* dimanche, je pourrais aller jouer au tennis.

(33) Si ton chien *lisait* un jour mon livre, il serait drôlement content.

Car je parle de lui en termes extrêmement élogieux.

(32) の発話者は明日が金曜日であることを述べた上で「日曜日である」というありえない状況を、(33) の発話者は自分が書いた本をいつの日か「あなたの犬が読む」というありえない状況を、半過去の〈*si P*〉によって設定している。

3. 1. 3. 〈*si P, Q*〉構文の基本的なはたらき

(02), (03) や (23) - (33) のような蓋然性が高くない状況を〈*si P*〉によって設定する場合、発話者は *P* のある状況においてなら生起・持続すると推測される事態として、つまり *P* の論理的帰結として *Q* を提示する。さまざまな発話例を観察すると、*P* がある状況と帰結 *Q* のあいだには、「*P* がある状況はなんらかの意味で問題ををはらんでいるが、帰結 *Q* によって解決に向かう、解消する」という関係を認めることができる。

まず、現在スペースの蓋然性が高くない状況を設定する場合はどうか。たとえば (02) では、「彼女が私の娘である」という *P* がある状況は現実反して、その意味で現実世界を乱すものである。しかし、そのような状況におい

では「こんなふうに行動させておかない」という価値ある帰結 **Q** が存在すると推測されるために乱れは意識されなくなって平穏に戻る。(26) では、街なかで相手の眼鏡フレームのねじが緩んだ場面において「あなたがドライバーを持っている」という **P** が存在する状況はかなり突飛なものだが、そのような状況においては「簡単にそれを直してあげる」という大きな利益をとまなう帰結 **Q** があると推測されるために突飛さはうすれて物事は丸くおさまる。

未来の蓋然性が高くない状況を設定する場合も同様である。たとえば (03) では「ソフィーが彼をふる」という **P** がある状況は意表をつくものだが、その状況においては「アンドレが悲しむ」という相応の反応 **Q** が存在すると推測されて物事は落ち着くべきところに落ち着く。(32) では、「日曜日である」という現実と反する **P** がある状況は未来の世界に混乱を招くものだが、その状況においては「テニスをしに行ける」という喜ばしい帰結 **Q** があると推測されるために混乱は収まって平穏に戻る。

このように見てくると、現在スペースまたは未来において成立する蓋然性の高くない状況（現実味のうすい状況と現実と反する状況）はなんらかの意味で問題をはらんでいるが、その状況において生起・持続すると推測される帰結事態 **Q** によって問題が解消して安定状態が得られるという図式が認められる。つまり、仮定用法の場合にも、現実用法の場合の〈**si P, Q**〉構文について (19) に示したようなはたらきが認められるのである。したがって、現実用法と蓋然性が高くない状況を設定する仮定用法について認められる〈**si P, Q**〉構文の基本的なはたらきは次のように示すことができる。

(34) 〈**si P, Q**〉構文の基本的なはたらきは、「**P** がある状況には **Q** があって安定する」ということを表すことである。

成立する蓋然性が高くない状況を半過去の〈**si P**〉によって設定する場面にについて、ぜひとも指摘しておくべき重要なことがある。それは、設定するのが「現在スペースまたは未来の状況」であることが聞き手に了解されているということである。発話者は、(02), (03) や (23)–(33) のような発話をいきなり口にしたりはしない。設定するのが「現在スペースまたは未来の状況」であ

ると聞き手に分かってもらえるように、対話場面のさまざまな要素やそれまでの話の流れから聞き手がどのように物事をとらえているかを考えつつ、話を進めるのである。

3. 2. 蓋然性が高くない状況と半過去

(02), (03) や (23) – (33) では、発話者は成立する蓋然性が高くない状況を半過去の〈*si P*〉によって設定し、その状況においてなら存在すると推測される *Q* を過去未来形で表している。成立する蓋然性が高くない場合でも、「*P* がある状況」を設定するということは、*P* が確かに生起・持続する状況、つまり確定的な *P* がある状況を仮に想定することにはほかならない。たとえば (02), (03) の場合、発話者は「彼女が私の娘である」、「ソフィーが彼をふる」という事態が確かにある状況を仮に想定しているのである。こうして、発話者は〈*si P*〉の節内では *P* を確定的な事態として表すことになる。その際に、未来形・前未来や過去未来形・過去前未来を用いることはない。それらは、1. 2. で述べたように、現在スペースまたは過去スペースから未来方向を展望して思い描く事態、つまり存在が推測や意志の対象であるような不確定な事態を表す時制だからである。その点、半過去は、過去スペースにおいて確かに生起・持続した確定的な事態を表す時制であり、まったく問題ない。

このように *P* を確定的な事態として表すのは、(35) のように現在スペースまたは未来において成立する蓋然性が高い状況を設定する場合も同じである。

(35) *Si elle continue ainsi, elle arrivera.*

(H. Troyat, 1986, *A demain Sylvie*, 6)

「*P* がある状況」を蓋然性が高い状況として設定するということは、やはり、*P* が確かに生起・持続する状況、つまり確定的な *P* がある状況を仮に想定することにはほかならない。(35) の場合、発話者は「彼女がこの調子でいく」という事態が確かにある状況を仮に想定している。こうして、(35) の発話者は〈*si P*〉の節内では *P* を確定的な事態として表すことになる。その際に、不確定な事態を表す時制である未来形は用いることができないが、現在形は、現在

スペースの確定的な事態を表す時制であり、まったく問題ない。

「確定的な *P* がある状況を仮に想定することが $\langle \text{si } P \rangle$ による表現に結びついている」という考えかたが妥当であることは、 $\langle \text{si } P \rangle$ がモダリティ表現と共起しないという事実によっても支持される。これに関しては、Barbazan (2005, 426) にも、“le modalisateur *peut-être* est incompatible avec la protase d’une proposition pourtant dite hypothétique” という指摘と次の発話例が見られる。

- (36) *S’il est *peut-être* arrivé, il nous préviendra./ *S’il était *peut-être* arrivé, il nous préviendrait.

$\langle \text{si } P \rangle$ は、*peut-être* だけでなく、同種の他のモダリティ表現とも相性が良くない⁽⁷⁾。

- (02’) *Si elle était *sûrement* ma fille, je ne la laisserais pas agir comme ça.

- (03’) *Si Sophie le quittait *sans doute*, André aurait du chagrin.

一方、 $\langle \text{si } P, Q \rangle$ の *Q* は、「*P* がある状況」において存在することになる帰結の事態である。前件 *protase* の *P* に対応する後件 *apodose* であり、*P* のスペースから未来方向を展望して思い描く事態にほかならない。したがって、*P* を半過去で表す場合に *Q* を過去未来形（行為が完了段階であれば過去前未来）で表すのは自然なことである。

3. 3. 聞き手の受け取りかた

上の 3. 2. で半過去が *P* を確定的な事態として表す適性をそなえていると述べたが、確定的な事態として表す適性は現在形もそなえている。それなのに、*P* を現在スペースまたは未来において生起・持続する蓋然性の高くない事態と聞き手がとらえるようにする場面では、発話者は現在形ではなく半過去を用いる。それには、以下に見るように、(14) に述べた「半過去の発話は事態を表すとともに、その事態が生起・持続する過去スペースを喚起する」という半過去の特徴が深くかかわっている。

3. 1. の最後に指摘したように、多くの場合、対話場面のさまざまな要素と談話の流れから、聞き手には発話者が〈**si P**〉によって設定するのが「現在スペースまたは未来の状況」であることが分かっている。ところが、半過去が用いられているために、聞き手は **P** にかかわる過去スペースを想起することになる。そこで、念頭にある「現在スペースまたは未来」に動詞時制がうまく対応していない、不適合であると感じざるをえない。この場合の不適合であるという感じは、具体的には「時間的にずれている、隔たっている感じ」である。実際、〈**si P**〉の半過去のために聞き手が想起する過去スペースは、1. 1. で見たように、発話者と聞き手のいる現在スペースとは断絶した広がりであり、多かれ少なかれ時間的に隔たっている。そのために、半過去の〈**si P**〉によって表される状況は遠い世界のここのように響く、つまり「現実味のうすい、現実に反する」という感じをとまなうのである。このような表現効果は、現在形を用いるのでは生じることがない。

(01) や (20) – (22) の場合、半過去の〈**si P**〉によって設定するのは過去スペースにおける現実の状況であった。それに対して (02), (03) や (23) – (33) の場合に同じ半過去の〈**si P**〉によって設定するのは、想像上の状況である。発話者の期待どおりに聞き手が現在スペースまたは未来において成立する蓋然性が高くない状況と解釈するのは、それを促す要因があるからである。おもな要因としては、**A–D** のようなものが考えられる。

A. 事態 **P** の内容

P が論理的に考えて存在するはずのない事態の場合、聞き手は、現実に反する状況と解釈する。

(37) *Si j'étais toi, je déclinerais leur invitation.*

(38) *Moi, si j'avais plus d'argent, je m'achèterais ce studio-là.*

B. 物事についての知識

P が現実味のうすい（または現実に反する）事態であることが、話題になる人や事物などに関する知識から割り出せることも珍しくない。たとえば (26) の場合、聞き手は自分自身のことだから、(先行文脈でドライバーの所持がな

んら話題になっていない場面でも）発話者が現実味のうすい状況を設定しようとしていると受け取る。(33) の場合は、聞き手は犬が読書能力を欠いていることを知っているために現実と反する状況と解釈できる。また、発話者が梅雨のさなかの蒸し暑い東京で翌日の予定が話題になっている場面で(39)のような発話を構成する場合、東京の気候を知っている聞き手であれば、現実味のうすい状況と解釈することになる。

(39) *S'il faisait beau et frais, j'irais me promener dans les rues.*

C. 先行文脈

〈*si P, Q*〉の発話に先行する文脈も大きな役割を演じる。たとえば、(29)－(31)は小説と映画から収集した発話だが、直前の対話の内容から、聞き手は〈*si P*〉を未来の現実味のうすい状況と正しく解釈することができる。また、(32)では直前に「明日」の曜日が述べられているために、聞き手は〈*si P*〉を迷いなく未来の現実と反する状況と解釈することになる。

D. 主節 *Q* の時制

(01) や (20)－(22) のように主節 *Q* の時制も半過去または大過去であれば、〈*si P*〉によって設定するのは過去スペースにおける現実の状況という解釈が優先する。それに対して、*Q* の時制が過去未来形なら、聞き手は帰結事態 *Q* を現実味のうすい（または現実と反する）事態ととらえ、そこからさかのぼって前件〈*si P*〉を蓋然性の高くない状況と解釈することになる。

発話者の側では、A-D のような要因を意識しつつ、期待どおりに聞き手が受け取ってくれるように配慮しながら話を進めるものと考えられる。

3. 4. 「不適合な」時制使用の表現効果

一般に、発話者が話題にする事態の時期に対して「不適合な」時制を用いると、なんらかの表現効果が生じることになる。上で見たとおり、対話場面のさまざまな要素や談話の流れの中で聞き手が現在スペースまたは未来の状況を予想している場面では、当然ながら半過去は不適合な時制であり、半過去が喚起する過去スペースの現在スペースからの隔たりのために〈*si P*〉は蓋然性が高

くない状況と受け取られることになる。

話題にする事態の時期に対して時制が喚起するスペースの時間的隔たりが大きければ、設定する状況の「現実味のうすい、現実に反する」という感じはそれだけ強まるようである。そのことを (40a, b) に即して見ておこう。インフォーマントによれば、半過去の (40a) はかなり不自然だが、大過去の (40b) は問題ない。

(40) a. ??Hélas, notre grand-mère nous a quittés. Si elle *pouvait* être avec nous demain, ce serait tellement mieux.

b. Hélas, notre grand-mère nous a quittés. Si elle *avait pu* être avec nous demain, ce serait tellement mieux.

先行文脈から「祖母」がこの世にいないことが明らかである以上、発話者が〈*si P*〉によって設定しようとするのは未来において成立することがありえない状況である。(40a) のように半過去を用いると蓋然性が低い状況、つまりありうる状況という解釈の余地が生じてしまい、先行文脈になめらかにつづかない。その点、(40b) のように大過去を用いると設定しようとするのが現実反する状況であることが明確になる。これは、大過去が「過去スペースからさらに過去方向を振り返って記憶から取り出す過去の出来事」を表しうる時制であり、喚起する過去スペースがそれだけ遠く隔たっていることによる。

話題にしようとする時期に対する「時制が喚起するスペースの隔たり」にもとづくこのような説明は、Imbs (1968, 98) の “L'imparfait modal” という項目に示されている考えかたに通じるものである。

(41) (...) l'imparfait de l'indicatif, au lieu d'exprimer un fait passé réel, exprime un fait hypothétique passé, présent ou futur : l'écart temporel entre le présent et le passé est utilisé pour traduire un écart modal entre le réel et l'imaginaire.

しかし、“au lieu d'exprimer un fait passé réel” は過去スペースの現実の事態を表さないで代わりに仮定の事態を表すという記述であり、問題がある。仮定の事態という解釈は、半過去が過去スペースの現実の事態を表すからこそ可

能になるのだから。仮定用法の場合も、半過去のはたらきは(14)に示したように過去スペースの事態を表すことであり、半過去がそのような時制だからこそ「現実味のうすい、現実には反する」感じをとまなうという表現効果が生じるのである。

もちろん、発話者が「不適合」にもとづく表現効果を利用するのは、半過去の場合だけではない。たとえば、〈**si** P, Q〉の Q が現在スペースまたは未来の現実味のうすい（または現実には反する）帰結事態である場合に過去未来形または過去前未来で表すのもその一つである。実際、(02), (03), (23) – (33), (37) – (39), (40b) の主節の Q が現在スペースまたは未来の現実味のうすい（または現実には反する）事態と解釈されるのは、過去スペースから未来方向を展望して思い描く過去未来という遠く隔たった時期の事態を表す「不適合な」時制を用いていることによると説明できる。

4. おわりに

本稿では、現在スペースまたは未来の蓋然性の高くない状況を半過去の〈**si** P〉によって設定するしぐみの解明に努めた。

まず、「以前スペース」の事態を表すことを基本的なはたらきとする半過去について、過去スペースの事態を表す場合の特性を(14)のように示した。

- (14) 半過去を用いるのは、過去スペースを想起し、そこにおいて生起・持続する事態を表すときである。半過去の発話は事態を表すとともに、その事態が生起・持続する過去スペースを喚起する。

そして、〈**si** P, Q〉構文の基本的なはたらきを(34)のように示した。

- (34) 〈**si** P, Q〉構文の基本的なはたらきは、「P がある状況には Q があって安定する」ということを表すことである。

これらを踏まえて、対話場面における聞き手の受け取りかたを重視する立場から、「現在スペースまたは未来の状況」を〈**si** P〉によって設定する場面において半過去という「不適合な」時制を用いることが時間的な「隔たり」を通

じて「現実味のうすい、現実に反する」という表現効果につながっていることを明らかにした。

紙幅の制約のために、〈*si P*〉によって過去スペースの状況を設定する場合については論じることができなかった。また、過去スペースまたは未来の事態を表す場面での現在形使用をはじめ、言及する事態の時期に対して動詞時制が喚起するスペースが不適合であることにかかわる他のさまざまな事象も詳しく検討することができなかった。それらについては、別の機会に論じることにした。

注

- (1) 〈*si P*〉は主節 *Q* に先行するとは限らないが、本稿では 〈*si P*〉と *Q* から成る発話を節順にかかわらず 〈*si P, Q*〉で示す。
- (2) 出典を示していない発話例は、インフォーマント（フランス人4人）の協力を得てわれわれが作成したものである。Olivier Birmann 氏（関西学院大学）との討論からはとくに多くの示唆を得ることができた。
- (3) 一般に「事実的用法」（林, 2001, 16）または「事実用法」と呼ばれているが、本稿では 2. 1. に述べる理由から「現実用法」と呼ぶ。
- (4) 事態をとらえる主体は話題になっている人物のこともある。つまり、発話者は自分以外の人物の気持ちになって動詞時制を選ぶことがある。
- (5) 詳細については曾我（2007）を参照。
- (6) 発話意図がこのようなものであるために、現実用法の発話は 〈*si P*〉に *Q* がつづく節順にかぎられる。
- (7) 状況の「蓋然性が高くない」という性格を明示するために、*par chance, par hasard, seulement* のような語句を 〈*si P*〉に加えることは問題ない。ex. *Si seulement j'étais équipée d'un bouton retour immédiat à la réalité, ça m'arrangerait un peu.* (D. de Vigan, 2011, *No et moi*, Poche, 40)

参考文献

- BARBAZAN, M. (2005), *Le temps verbal, Dimensions linguistiques et psycholinguistiques*, PU du Mirail.
- BARCELO, G.-J. & J. Bres (2006), *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- BRES, J. (2005), "L'imparfait: l'un et/ou le multiplie ? A propos des imparfaits «narratif» et «d'hypothèse»", *Cahiers Chronos* 14, Rodopi, 1-32.

- CORMNBOEUF, G. (2009), *L'expression de l'hypothèse en français Entre hypothèse et parataxe*, De Boeck/ Duculot.
- HAILLET, P. P. (2002), *Le conditionnel en français : une approche polyphonique*, Ophrys.
- 林迪義 (2001) 「接続詞 *si* と事実」『フランス語学研究』35, 15-21.
- IMBS, P. (1968), *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- 石野好一 (1993) 「戦略としての接続表現－ファジーなフランス語 4－」『ふらんす』1993 年 7 月号.
- 古石篤子 (2005) 「愛のトボスー接続詞 *si* の多義性について－」木下教授喜寿記念論文編集委員会編『フランス語学研究の現在』, 白水社, 237-247.
- LE GOFFIC, P. (1993), *Grammaire de la phrase française*, Hachette.
- 曾我祐典 (2007) 「フランス語における『語調緩和の半過去』」『人文論究』57-1, 関西学院大学人文学会, 71-86.
- 曾我祐典 (2012 予定) 「*depuis* が導く時況節の動詞時制」『フランス語学の最前線』, ひつじ書房.
- 曾我祐典 (2013 予定) 「仮定節〈*si* P〉における半過去の使用」『フランス語学の諸問題Ⅳ』, 三修社.
- 三藤博 (2011) 「条件文の日仏語対照研究－*si factuel* を中心に－」, 関西フランス語研究会発表ハンドアウト.